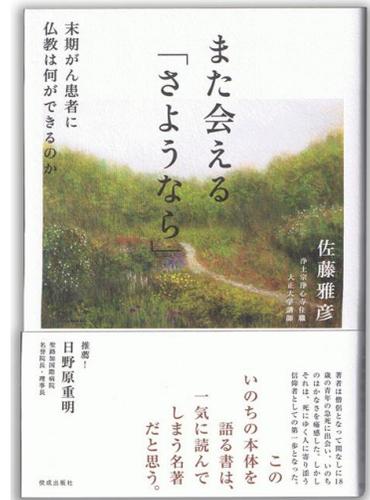


●井上さんの書籍紹介

また会える「さようなら」  
ー末期がん患者に仏教は何ができるのかー  
佐藤 雅彦 著  
佼成出版社 2010年9月初版



はじめに

近代ホスピスの創始者であるシシリー・ソンドース(1918~2005)は、次のように提唱した。末期がんの痛みには、(1)身体的痛み(physical pain) (2)精神的痛み(psychological pain) (3)社会的痛み(social pain) (4)スピリチュアルペイン(spiritual pain) の4つの痛みがある。それらは相互的に影響しあっているの、包括的にトータルペイン(total pain 全人的な苦痛)として捉え、積極的にこれらの苦痛に対してかかわることを、ホスピスの理念とした。

世界保健機構(WHO)も、ホスピスケアの代わりに、緩和ケアという用語を用いているが、この概念を踏襲して、緩和ケアを定義した。他方、日本の緩和ケアに精通しているキッペスは、1999年、「日本の医療界ではスピリチュアルケアが必要だとの認識が未だ十分に育っておらず、位置づけも不十分で伝統が確立していない」と指摘した。凶星だと思ふ。がん性疼痛の診断・治療法、すなわち、身体的痛みへの対処法は、教科書にも書かれているが、その他の痛みに対して、具体的な方法の記載はない。私も、がんに罹り、様々な痛みを感じたが、愚痴となるようで、誰にも相談しなかった。

多くの日本人は、信者としての自覚がない仏教徒である。私もそうだ。宗教の話は敬遠されるが、今回、痛みへの対処法を考えてみたかったので、敢えて、本書を取り上げた。

著者の紹介  
佐藤雅彦

1958年東京生まれ。17歳の時、東京都文京区・浄土宗浄心寺で出家、得度。2005年より同寺・24世住職に就任。大正大学大学院博士課程修了後、ジョージタウン大学ケネディ倫理研究所で、2年間、生命倫理の研究に従事。現在、大正大学、武蔵野大学の非常勤講師も兼任。この他、末期がん患者や死を間近にした人々のベッドサイドを訪問する「心のケア・ボランティア」にも取り組まれている。日本生命倫理学会・常任理事、日本死の臨床研究会・常任世話人。

本書の内容・感想

スピリチュアルペインは、よく「霊的苦痛」と訳されるが、理解しがたい。身体的痛みとは文字通りの体の痛み、不安・いらだち・抑うつなどが精神的痛み、社会的痛みとは仕事上の、経済上の、家庭内の悩みなど。そして、スピリチュアルペインとは、自分がなぜこの病気になったのか、本当に死ぬのだろうか、死ぬことを待っているのならば生きている意味はあるのかなどである。「人間は霊肉備えた存在」、言い換えると、人間には、肉体だけでなく、魂(スピリッツ)、霊魂と表現できる非物理的要素も備えているというキリスト教の教えに基づき、このように呼ばれている。それ故、キリスト教信者以外は理解しにくいかもしれない。一方、キリスト教徒以外でも、私のような仏教徒でも、科学万能主義者でも、スピリチュアルな悩みを抱くのも事実である。では、どのように対処すればよいのか。

まず、佐藤先生が行われている、「心のケア・ボランティア」について紹介する。日本の病院では、「宗教」という言葉を用いると、後ずさりされるので、そのように呼ばれている。その活動で、自らの宗派の話をされることはない。どの宗派にも通じる仏教の根本的な話が軸となる。それは、布教・伝道することが目的ではないからだ。

ところで、心の痛みの緩和は、欧米の病院や施設などでは「チャプレン」という職種の人が担っていることをご存じの方も多であろう。留学中に、実際に見られた、チャプレンの話も、興味深かったので、抄出する。

『あるチャプレンより。「キリストの話や教え？ そんなことはまず話さないね。話すことといえば、今日の天気やテレビのことかな。もちろん、請われれば、聖書だって読んで聞かせるよ」。チャプレンの存在は、キリスト教の教えに触れるという狭い宗教的な関わりではなく、病床にある人々を孤独にしない、懐の広い関わりを目指すものだ」と、この時、教えられた。チャプレンは、専門的なプログラムを受けることによりなることができる。聖書を抱えた神父や牧師ではなく、普通の主婦でもなることができる。「病院付き牧師」とよく訳されるが、「病院付き宗教的ケア担当者」と理解した方がよい。』

この話を聞くと、私にもできそうで、気が楽になった。では、佐藤先生は、どのような「心のケア・ボランティア」をされているか、その1例を紹介しよう。

『多くのがん患者さんの共通の悩みは、「どうしてこの病気になったのだろう」である。

私は、患者さんがこのことについて問う時、迷わず、ご縁の話をする。「つらいご縁と出会いましたね」と声をかける。すると患者さんは「こんなにつらいこともご縁というのですか？ 私は健康にご縁がなかったのだと受け止めています」。それから、私は、お釈迦さまの話をする。

お釈迦さまは「すべての物事は因縁によって成り立っている。ご縁によっておこる」と説いている。一般的には、良いこと、好ましいことに会った時に「ご縁がある」と言う。しかし、この良いこと、好ましいことは、「私にとって」良いこと、好ましいことであり、自分の都合を中心にした考え方である。これに対してお釈迦さまの考え方では、つらく思いどおりにならないことも「ご縁」と受け止め、前向きに生きるのだ。

「なぜ私が、病気になってしまったのでしょうか？」。この問いかけの答えは「わからないけれど、そのようなご縁をいただいた」としか言うことができないのだ。

私は、わからないことを、わからないこととして受け入れる心こそ、大切にしなければならないと思っている。人生を三十年生きた人も、八十年生きた人も、その間、私たちが学んだことは、この広い世界の、宇宙の営みのほんのわずかなことでしかない。謙虚に、わからないことを認める勇気を持つことこそ、生きる智慧というのではなからうか。』

この答えに満足できない患者さんも多いのであろう。このようなスピリチュアルな問題は、正解のない問いで、形而上の問いであることも事実である。佐藤先生の回答は、宗教的というより、哲学的な答えと捉えることもできるのかもしれない。

しばしば、「緩和ケアの充実を」と言われるが、このことにはあまり触れられないし、敬遠される傾向があるのではなからうか。充実した緩和ケアをつくりあげるには、スピリチュアルな問題にも正面から取り組み、患者さんに寄り添う必要があると思う。皆様にも、ぜひ、このような本を通して考えていただきたい。

会員 井上 林太郎